

* メルツ・レプソルド子午環の写真発見

メルツ・レプソルド子午環は1879年ドイツ・ハンブルグで製作され、1880年に明治政府の海軍天文台に到着している。口径143mm、焦点距離1490mm。1888年東京天文台発足に伴い、海軍天文台から東京天文台に移管された。1923年9月1日に起きた関東大震災で架台から落下し大破したと伝えられていた。そしてその姿は東京天文台90年史、100年史、東京大学100年史の東京天文台偏にも見られず、写真さえ残っていないものと思っていた。ところがきちんと検索すれば出てくるのである。東京天文台年報第2巻の寺尾寿の論文のなかにメルツ・レプソルド子午環の写真が載っていたのである。それが写真1である。

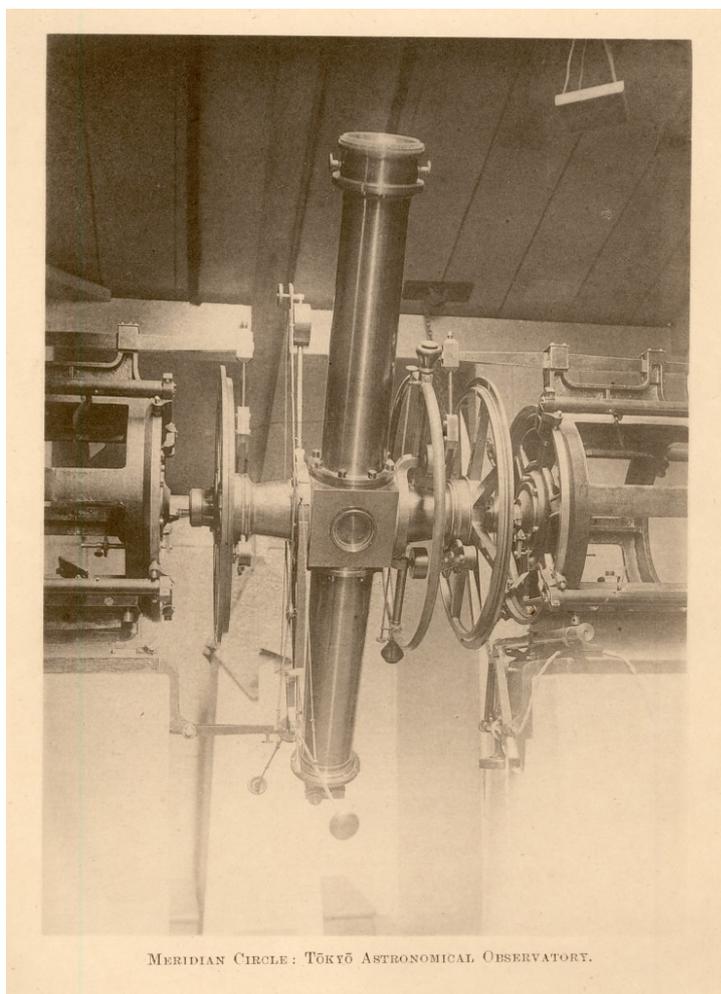


写真 1 メルツ・レプソルド子午環

この度、談天の会に出席し講演した際に、一戸直蔵の資料の引き受け手を捜しておられるアマチュア天文家があり、国立天文台天文情報センターにアーカイブ室が発足しているの

で、ぜひお引き受けしたいと手を上げ、一戸直蔵の資料を入手したことはすでにアーカイブ室新聞 31 号に書いた。

この資料の中の一戸直蔵の著書「通俗講義 天文学」上巻にメルツ・レプソルド子午環の写真があった。その著書のなかにはこの写真がメルツ・レプソルド子午環とは書かれていないが、確かにそのものである。写真 1 はその全体像を見ることが出来ないが一戸直蔵の著書の中の写真はその全体像が写っている。写真 2 がメルツ・レプソルド子午環である。

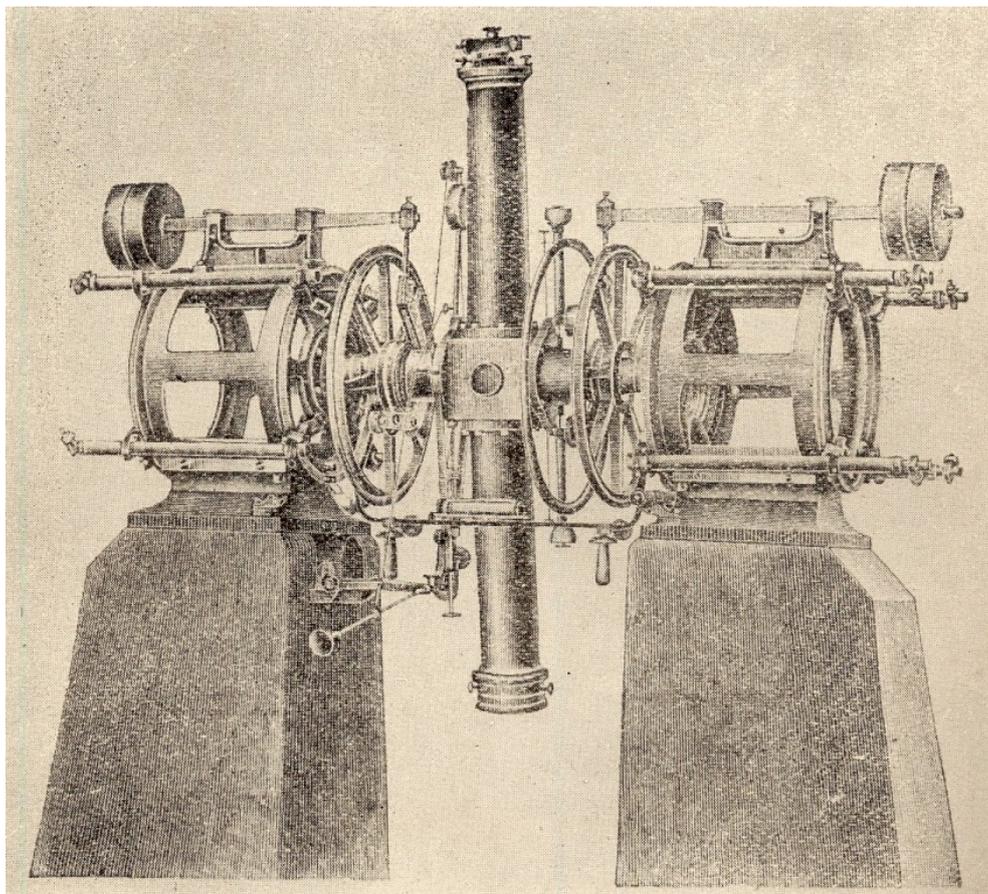


写真 2 下を向いたメルツ・レプソルド子午環

写真 2 では、子午環をバランスウエイトで浮かせたような構造になっていること、懸架式水準器、目盛を読む東西 4 本ずつの顕微鏡などが見て取れる。関東大震災で大破したとはいえ、その残骸でも残っていれば当時の創意工夫を凝らした技術を学ぶことができると思うと非常に残念である。